

# ハムレットと聖ポール寺院の庭 —記憶を巡る父子の物語—

鶴 田 学\*

## はじめに

チャールズ・ディケンズ（1812–70）が熱烈なシェイクスピア愛好家であったことは、ヴァレリー・L・ゲイジャー（Valerie L. Gager）著、『シェイクスピアとディケンズ：影響の力学』（*Shakespeare and Dickens: The Dynamics of Influence*）に詳しい。同書のおよそ三分の一は、ディケンズの文学作品、書簡、演説に残されたシェイクスピアからの影響を作品別にまとめた目録であり、その数は約千点にものぼるのだから驚きである。たとえば「クリスマス・キャロル」の冒頭、これはゲイジャーを持ちだすまでもないほどよく知られた例なのだが、『ハムレット』と聖ポール寺院の庭とが結びついて、ある滑稽な場面が描かれている。

There is no doubt that Marley was dead. This must be distinctly understood, or nothing wonderful can come of the story I am going to relate. If we were not perfectly convinced that Hamlet's Father died before the play began, there would be nothing more remarkable in his taking a stroll at

---

\* 福岡大学人文学部教授

night, in an easterly wind, upon his own ramparts, than there would be in any other middle-aged gentleman rashly turning out after dark in a breezy spot—say Saint Paul’s Churchyard for instance—literally to astonish his son’s weak mind. (Dickens 9)

これだけでも十分に長い脱線である。だが、元の草稿には上と同程度の分量の続きがあり、ハムレットのような扱いにくい息子は「一生を終えてみれば、大のお荷物だったと判明する (after his decease, he would prove a special incumbrance)」こと請け合いだ、という辛辣な評価が記されている (Gager 272)。

上に引用した戯画が醸し出すおかしみは、息子を悲劇に巻きこむ父ハムレットの亡霊をいかにも俗物臭がする英国紳士に転化して笑い草にしようところにあるのだが、ディケンズとその同時代人が見ていた聖ポール寺院は、エリザベス朝の人々が見ていたそれとは異なるものだった。エリザベス朝のものは1666年のロンドン大火 (the Great Fire) で焼け落ちる以前のゴシック様式の建築物であった。ディケンズの時代にはすでに建築家クリストファ・レン (Christopher Wren) (1632–1723) がイタリアの聖マルコ寺院を模倣して設計したロマネスク様式になっており、これは第二次世界大戦におけるロンドン大空襲 (the Blitz) の戦禍を免れて現代に至る、我々にもなじみのある寺院の姿である<sup>1</sup>。異なるのは建築様式ばかりではない。シェイクスピア時代の聖ポール寺院は、宗教・娯楽・政治・書籍文化の要素が混在したメディアの拠点だったのである。聖堂の南西には少年劇団のための劇場を備え、反対側の北東の庭には、二十余の書店が壁沿いに軒を並べ、壁の内側には説教に耳を傾ける聴衆が集う広場があった (Young 136)。『ハムレット』などの演劇が出版物として印刷、販売されたのも、そうした環境であり、実に17世紀初頭、同寺院の庭

---

<sup>1</sup> 聖ポール寺院の描写については、Jennifer Young によるエッセイ、‘Religion in Shakespeare’s London: *Hamlet* (1600–1) and St Paul’s’ を参照のこと (Young 124)。

において、キングという名前の説教師がハムレットのように亡き「父の記憶」と向き合いながら説教を行った歴史もある。本論は、その説教をヒントとして、シェイクスピアが遺した最高の悲劇における「記憶」の問題について考えてみたいと思う。

## 1. 説教師ヘンリー・キングと父の記憶

奇しくも説教師ヘンリー・キング（Henry King）（1592－1669）のデビューは「記憶」に関与していた。1617年11月5日、彼は、聖ポール寺院の庭に設けられた説教壇ポールズ・クロス（Paul's Cross）に立ち、カトリック教徒の不満分子が画策した陰謀から難を逃れた国王ジェームズ一世の幸運と新興プロテスタント国に与えられた神の加護を祝うため、記念の説教を行った<sup>2</sup>。この説教は12年前、1605年の同日に起こった火薬陰謀事件（the Gunpowder Plot）が未遂に終わったことを言祝ぐものであった。同事件は、現代風に言えば、宗教対立に起因する、国家の中枢を狙った爆破テロ事件であり、成功していれば、近現代の世界史すら変わっていたであろう大事件である。「11月5日を忘れるな（Remember the 5th of November）」とは、事件を風化させないために唱えられたスローガンであり、人々の記憶を折に触れて想起させるために利用された手段が説教であった（Sharpe 70－106；Fraser 352）。

それからおよそ4年の月日を経た1621年11月25日、ヘンリー・キングは新たな説教を行うために、ふたたび説教壇ポールズ・クロスに立つ（MacLure 242－43）。その説教においては「想起」する行為自体が問題となっていた。説教師ヘンリー・キングは「ヨハネによる福音書」15章20節の聖句「わたしが

---

<sup>2</sup> MacLure, *The Paul's Cross Sermons 1534－1642* の巻末付録である説教の一覧表を参照のこと（MacLure 239）。

あなた方に言った言葉を忘れるな (Remember the word that I said unto you)」<sup>3</sup>を枕に、信仰における「想起」する能力の重要性を説いた。4年前の晴れやかなデビューを飾った説教における想起は、プロテスタント国家のアイデンティティに関わる記憶の問題であった。一転して、今回の説教においては、ヘンリー・キングは父の記憶を背負っていた。ヘンリーの父であるジョン・キング (John King) (–1621) は、ロンドン主教 (1611–1621) を務めた英国国教会の高位聖職者<sup>4</sup>として1621年3月30日に逝去していた。ところが、父ジョンは、忌の際になってカトリックに改宗したという不名誉な噂を広められていたのである。1621年に出版された『ポールズ・クロスにて説かれた説教』(*A Sermon Preached at Pauls Crosse*)の扉には「故ロンドン主教ジョン・キング師の背教嫌疑に関する、虚偽の中傷による (先に印刷された) 報告に抗議する (Upon occasion of that false and scandalous Report (lately Printed) touching the supposed Apostasie of the right Reverend Father in God, JOHN KING, late Lord Bishop of London)」(A2)<sup>5</sup>説教とある。

また、巻頭に置かれたヘンリー自身の手による献辞には同書が皇太子チャールズの庇護を受けて日の目を見るに至った経緯も以下のごとく記されている。

I durst not entitle any other Patrone to the remainder of what he [my father] was, his Memory, without leave from your Highnesse. But as it was my filiall duety to vindicate a wronged Father, so I held it the tribute of my civill duty to tender it first to your Hands, that it might take sanctuary under your Princely wing. (A3<sup>v</sup>–A4)

---

<sup>3</sup> 『聖書』からの引用は、*The Bible: Authorized King James Version with Apocrypha*. (Oxford: Oxford University Press, 2008) による。

<sup>4</sup> John King の宗教的な立場は「カルヴァン派主教制主義 (Calvinist episcopalianism)」と言われている (Collinson 82)。

<sup>5</sup> 当時の書籍からの出典を記す際には、ページ数ではなく折記号 (signature) を用いた。

「名誉を汚された父の復讐を行うこと (to vindicate a wronged Father)」は「息子としての義務 (filial duty [sic])」だと言う。この言葉遣いが、すでに復讐悲劇の語彙である。説教のなかで反復して引用される聖句「わたしがあなた方に言った言葉を忘れるな」は、父ジョンの記憶を回想しつつ長男としての責任を果たさねばならない説教師ヘンリー自身を鼓舞しているかのように聞こえる。「想起せよ (Remember)」という発話行為 (speech act) は、信者に向けられた福音書のなかのイエスの声であり、説教するヘンリーの声でもあり、また究極的には、ヘンリーの心中に響く父ジョンの声、すなわち「記憶」の声でもある。記憶を巡るこの父子の物語は、紛れもなく、劇作家シェイクスピアが描いたハムレット父子の「記憶」に通じている。

## 2. 亡霊の言葉と記憶

21 世紀のシェイクスピア批評は、K. ジャクソン=A. F. マロッティが提唱した「宗教への回帰 (turn to religion)」<sup>6</sup> という合言葉に集約されるように、シェイクスピア時代の宗教に着目している。この宗教の時代を象徴する一冊がスティーヴン・J・グリーンブラット (Stephen J. Greenblatt) の著した『煉獄のハムレット』(*Hamlet in Purgatory*) である。父から息子への継承の問題を近代初期英国における宗教的歴史的背景に還元し『ハムレット』の謎に挑んだ同書の前口上 (Prologue) において、グリーンブラットは、ユダヤ人としての自己同一性を赤裸々に語り、彼の父が亡くなったときに、はじめて「カディシュ (kaddish)」の重要性に目覚めたことを告白している (Greenblatt 6-7)。代表的な英和大辞典によれば、それは「死亡した親や兄弟のために、埋葬の日から

<sup>6</sup> このフレーズは、Ken Jackson, Arthur F. Marotti 共著による 'The Turn to Religion in Early Modern Studies' と題したマニフェスト・エッセイに由来する。

11ヶ月間、毎日3回の礼拝の際、および年忌の折に唱える頌栄<sup>7</sup>とあるが、グリーンブラットは、イディッシュ語の本来の意味においては「カディシュと呼べるのは〔故人の〕息子だけである（a son could actually be called a *kaddish*）」（7）と説明する。つまり、ユダヤ人にとって、それは単なる頌歌というよりは、むしろ後継者である息子の責任を意味するのであろう。ここにグリーンブラットが『ハムレット』における父子関係に心を引かれる理由がある。19世紀の終わりに生まれ、エキセントリックなヘブライ語教師から伝統的なユダヤの教えを受けた古い世代に属する父と世俗的な20世紀後半のアメリカ西海岸の大学でポストモダンの文学理論に貢献した自身との間にある差異にもかかわらず、歴然として存在する文化を継承する意識が、ハムレットの置かれた境地を探るグリーンブラットの洞察力となっているのである。

そのグリーンブラットも言うように、『ハムレット』という演劇の重心は、いつの間にか復讐そのものから父の「記憶」の方へと移っている（Greenblatt 206-8）。父ハムレットの亡霊が息子ハムレットに伝える別れ際の最後の言葉は「わたしを忘れるな（Remember me）」（1.5.91）<sup>8</sup>である。そのために息子はこれまでの無駄な記憶をすべて消し去り、今後は父の言葉だけを記憶に留めようと誓う<sup>9</sup>。やはり鍵となるのは「記憶（memory）」を「想起する（remember）」ことだ。

---

<sup>7</sup> 当該の語の定義の引用は『新英和大辞典』第六版（研究社）から。OEDの定義によれば ‘A portion of the daily ritual of the synagogue, composed of thanksgiving and praise, concluding with a prayer for the advent of universal peace ; specially recited also by orphan mourners.’ とある。

<sup>8</sup> *Hamlet* からの引用、及び幕・場・行数は the First Folio (1623) の本文を底本とした G. R. Hibbard 編 Oxford Shakespeare 版による。

<sup>9</sup> ハムレットの記憶力について「信じられないほどに足りない（incredibly short）」（139）と発言しているのが、David Scott Kastan のエッセイ、‘Forgetting Hamlet’ である。「忘却」しながらも主体性を保っているとする立場については Sullivan 13-14 を参照のこと。

Remember thee?

Ay, thou poor ghost, while memory holds a seat

In this distracted globe. Remember thee?

Yea, from the table of my memory

I'll wipe away all trivial fond records,

All saws of books, all forms, all pressures past,

That youth and observation copied there,

And thy commandment all alone shall live

Within the book and volume of my brain,

Unmixed with baser matter. (1. 5. 95 – 104)

あまりにもしばしば引用される有名な一節であり、すでに様々な意見が言い尽くされている感もあるが、それでも敢えて、引用に現れた二つのキー・ワードについて述べておきたいと思う。すなわち、globe (97), table (98) といった言葉の意味の広がりである。

ハムレットは「記憶」について語っているのだが、シェイクスピア時代の記憶のあり方について考察する場合には、当時の記憶についての社会通念を参照しなければならないだろう。奇しくもヘンリー・キングが父の記憶を背負った説教を行った 1621 年、説教壇ポールズ・クロスにほど近い寺院の敷地内にあった書店ではジョン・ウィリス (John Willis) が著した『記憶の技法』(*The Art of Memory*) と題した書物が売られていた。著者ウィリスによれば、彼はすでに記憶に関する三巻の書をラテン語で著していたが、より幅の広い読者層を求めて、そのエッセンスを平易な言葉、すなわち英語で書き下ろしたのだ (A3<sup>r-v</sup>) と言う。完全なタイトルは *The Art of Memory, so far forth as it dependeth upon Places and Ideas* と長く、ここに表現されているように、記憶にはそれを蓄積するための「場所」と記憶の中身である「アイデア」とがあり、それらを事細

かに分類しながら約百ページにわたって論述したものである。ウィリスの『記憶の技法』では、記憶が蓄積されるのは、高さ6ヤード、奥行き6ヤード、横幅12ヤードのまさに倉庫とでも言うべき空間らしいのだが（A7<sup>v</sup>–A8<sup>r</sup>）、『ハムレット』によれば、記憶の宿る空間はもっと重層的で複雑である。

ハムレットの言う「このかき乱された globe のなかに記憶が seat を hold する限り」（96–7）という台詞は三層構造になっている。まず、最も表層の意味として「このかき乱された世界のなかに記憶の在処がある限り」が考えられ、まさにウィリスの「記憶の倉庫」がこの世界のどこかにあるように言っている。次に、たとえば当時の劇場に関する権威であるアンドルー・ガー（Andrew Gurr）も言っているように、このときハムレットが頭を抱え込む動作をしながら台詞を朗唱しているのであれば「このかき乱された頭のなかに云々」という意味が浮上する。この二層目の読みは、上に引用した台詞の後半にある「私の頭脳（my brain）」（103）からも裏付けることができるだろう。さらにもう一つ洒落を重ねて this ... globe がテムズ川南岸の自由地区に建てられた劇場 the Globe を指示していると取れば「このかき乱された地球座のなかに記憶が席を確保している限り」とも解釈できるのである（Gurr 9–10）。実証的な史料のことを言えば、『ハムレット』の初演がいつどこで行われたのか、確たる証拠は何もない。しかしながら、地球座のオープンが1599年の夏頃であり、『ハムレット』の初演が1600–1年頃であるとすれば、劇作家が最初から三段重ねの洒落を意図していたことは十分に考えられる。

ハムレットは、父の「戒め/命令（commandment）」（102）を書き込む前に、ほかの余計な文字を「拭い去る（wipe away）」（99）必要があり、「下等なもの」と混ざらないように（Unmixed with baser matter）」（104）しなければならない。では、具体的に、どこから何をどのように「消去」して「書き込む」のだろうか？前に揚げたウィリスの『記憶の技法』によれば、記憶の仕組みは「アイデア」が整理されて倉庫のごとき「場所」に保管されることだ、と説明され



ているのだが、同書の「読者へ（To the Reader）」とした前書きでウィリスは以下のようにも述べている。

Writings (I confesse) are simply the most happie keepers of any thing in memorie, and doth for speed and certaintie go beyond any art of Memory: but a man cannot alwayes write that which commeth into his minde, (as when he is riding upon a journey, or lyeth awake in his bed, or is among companie at dinner, or in a throng of people, or is otherwise hindered by any the like occasion) therefore it will be necessarie for him then, to helpe his memorie some other way, at least till he can set downe that in writing, which he would remember. (A3<sup>v</sup> – A4<sup>r</sup>)

つまり、最も確実に記憶するためには物理的にメモを「書き込む」のが良いと言うのである。『記憶の技法』は、基本的には頭のなかに記憶を保つ仕組みについての書であるが、最後の数ページで話題は記憶の処理の仕方に移る。記憶を無理に保つのではなく、例えばメモに留めるなどの方法で「脇に置くこと (de-position)」により記憶の容量を解放するのである。

Deposition is, whereby things before committed to memory, are called to minde againe, and either committed to writing, or otherwise dispatched, that so it may be put out of our mind: and the memoriall places after such deposition of the Ideas being left emptie, may be the fitter to receive new Ideas into them. (E5<sup>v</sup>)

ハムレットの言う「私の記憶の table」（98）も比喩的に漠然とした記憶の場を指していると言うよりは、むしろシェイクスピア時代に流行した記憶の補

助としての「メモ帳」を具体的に意味すると考えられる。このことを実証的に明らかにしたのは2004年の *Shakespeare Quarterly* に掲載されたピーター・スタリーブラス (Peter Stallybrass) 等の論文「ハムレットの Tables と英国ルネサンスにおける書記の技術」(Hamlet's Tables and the Technologies of Writing in English Renaissance) であった。このスタリーブラス論文や先に挙げたグリーンブラットの『煉獄のハムレット』を参照枠として小気味の良いエッセイを書いたのが米国のメディア批評家、ウィリアム・パワーズ (William Powers) である。彼は「ハムレットのブラックベリー」(Hamlet's Blackberry) と題した論説において、シェイクスピア時代と現代の双方がともに急激に発達した情報過多の時代であり、最新の技術を用いて大量に公にされる情報に埋没しまいとする個人が「私の」記憶をどこかに刻み込もうと抗って、パーソナライズされた記憶装置を求めているのだと説明する (Powers 135-55)。言うまでもなく、シェイクスピア時代の情報過多とは、印刷術の普及によって大量に国内生産されるようになった書物と識字率の急上昇による潜在的な読者の増加とを意味する。現代人にとっては急速に進んだ有線・無線の電子ネットワーク環境の整備を意味するだろう。そこに繋がれた「小さなテーブル」という語源のタブレットを携帯する現代人にとって、シェイクスピアがハムレットに最新の「メモ帳 (table)」を率先して使わせる動機を察することは易しい。要するに、劇作家はお洒落な流行の先端を追いかける知的な王子像を描きかかったのである。

### 3. 記憶の金庫と鍵

ハムレット、説教師ヘンリー・キング、批評家グリーンブラットという三人の息子に共通するのは、父の記憶を正確に保つ厳しい至上命令であり、このこ

とは記憶することの困難さを照らしている。記憶の脆弱さに関してはヘンリー・キングの説教が実直な言葉を残している。彼は、‘Of all faculties in man, *Memory* is the weakest, first waxeth olde, and decayes sooner then Strength or Beautie.’ (D4) と記憶の老化について述べ、併せて、劣化する記憶に対抗する手段も明かしている。とりわけ、記憶という「金庫」とそれを開ける「鍵」というアナロジーは興味深い。

Now if they [the words of the Lord] be of such high esteeme, where should jewels bee put but in a Cabinet ; or where should gold be disposed but in a Treasure? Both these is *Memory*. First, it is a Cabinet, placed in the closet and bedchamber of the soule, the Braine ; the safest Keepe in mans Cittadell : one Key it hath, *Reminiscentia*, which opens it, and without that, it still remaines locked. (C1<sup>r-v</sup>)

神の言葉とは貴重な宝であり、その宝を入れる頭脳という金庫を開けるための鍵が「想起 (*reminiscentia*)」である。「金庫と鍵」の比喻がどれほど普遍的であったのかは定かでないが、『ハムレット』のなかにもその考え方が混入している。それは、フランスに旅立つ兄レアティーズと見送る妹オフィーリアとの対話である。『ハムレット』には二つの家族が描かれていて、一つは主筋である王家の話、いま一つが臣下ポローニアス一家の脇筋である。言うまでもなく、ポローニアスの娘オフィーリアがハムレットの恋人であり、息子レアティーズはハムレットのライヴァルである。レアティーズは、ハムレットによって父を殺害される（三幕四場）から、その段階からハムレットは復讐者であり同時に復讐される側に立つことになる。つまり、ポローニアス一家の存在が『ハムレット』という復讐悲劇をより複雑にしているのだが、「記憶」という主題に関してもそれは主筋を映す鏡となっている。

LAERTES

Farewell, Ophelia, and remember well

What I have said to you.

OPHELIA                'Tis in my memory locked,

And you yourself shall keep the key of it. (1. 3. 84–6)

このやり取りにおけるオフィーリアの返答に関して奇妙なことは、記憶を開けるための肝腎の鍵をその場で兄レアティーズに返してしまうことである。おそらく、作者シェイクスピアは、細かい理屈を抜きにして、単に「しっかりと二人の間で秘密にする」という程度の意味でオフィーリアに上のように言わせているように思われるが、深読みすれば、ここにオフィーリアという登場人物の主体性の欠如を指摘することができるだろう。オフィーリアの態度は、記憶に関する責任を他者に投げ返すものであり、父の記憶を全面的に引き受けてしまうハムレットの悲壮感からはほど遠い。このレアティーズ、オフィーリア兄妹が登場する脇筋の部分において「想起する (remember)」という主題がふたたび戻ってくるのは、皮肉なことに、オフィーリアが正気を失った後のことである。

OPHELIA (*to Laertes*)

There's rosemary, that's for remembrance. Pray, love, remember. And  
there is pansies, that's for thoughts.

LAERTES

A document in madness—thoughts and remembrance fitted.

(4. 5. 176–80)

レアティーズは、花言葉を挙げていくオフィーリアの台詞を受けて、「狂気で

書かれた教訓（a document in madness）」（180）と呼んでいる。「狂った」とされる恋人ハムレットから突き放され、さらには父ポローニウスを彼によって殺されたオフィーリアは「記憶（remembrance）」という言葉の口にしながらも、その責任を引き受ける能力に欠けている。オフィーリアが狂気を発症した直接の原因は、おそらく父を殺害されたことにある（Lees-Jeffries 100）から、その意味でも彼女はハムレットの哀れな鏡である。この直後に、オフィーリアはあの J. E. ミラーの描いた水面に浮かぶ姿に変わってしまう。

#### 4. 記憶から行動へ

ハムレットによって体现される能動的な記憶は、主体性に欠けたオフィーリアの受動的な記憶の在り方と対照的である。記憶することは単に言われた言葉を覚えるという意味ではない。そのことについて、ヘンリー・キングの説教は注意を促している。

I know not what better *exordium* a Preacher can make, or from what foundation the frame of his speech can more happily arise than from this, which is the first stone in this pile, *Remember*. It is the best charge the Priest can give, and the first lesson the People should learn; else, like children, that read only by rote, they shall spend much time and understand nothing. (B1<sup>v</sup>)

ここで刮目すべきは、想起のあり方とその厳しい定義である。現代の我々は、人が演説などの文章を暗誦して人前でよどみなく披露すれば、その言葉を自分のものになっていると考えがちである。ところが、説教師ヘンリーは、「ただ暗

誦 (rote) しているだけ」では学童のように「多くの時間を浪費し、それでいて何も理解していない」とまで言い切るのである。記憶は実行を伴わなければ意味がない。受動的に聴くだけであれば、それは鍵を他者に預けたオフィーリアの記憶となり、記憶は内側に閉じ込められたままであるだろう。埋没してしまった記憶は意味をなさないのである。ヘンリーは、以下のようにも言っている。

But is this all that Christ requires, only to *remember* his *Word*? No, there is a farther scope, *Ne sufficere tibi putes mandata Dei memoiriâ tenere, & operibus oblivisci*: thinke not the duty of a Christian is discharged by hearing onely, unlesse thou doe what thou art taught. For to keepe the Commandements in memory, and to break them in thy course of life ; to remember Christ in thy words, and forget him in thy deeds, is to mocke God, and foole away thy salvation. (D1<sup>v</sup>—D2<sup>r</sup>)

説教というものは聴衆一人々々の心に届かねばならない。それゆえに、説教のなかに現れるラテン語の直後には英語による意識がある。実際の説教の際にもラテン語を解する力のない聴衆のために、このようなパラフレーズがなされたのであろう。ある者に対しては荘重な響きのラテン語が、また別の者には平明な英語が有効だったのである。さらに、篤い信仰を抱く聴衆を震え上がらせたのは「言葉ではキリストを覚えていて、行動では忘却するならば、それは神を愚弄することである」という件である。なぜならば、そのような行為は「魂の救済」を失うことだからである。

説教師ヘンリー・キングが言うように、父の言葉を記憶しておきながら、それを実行できないことは冒瀆や裏切りとみなされる。父の亡霊の言葉を聞いた後にハムレットが苦悶する理由もここにあり、ハムレットが「記憶」を「行動」

に移そうとする瞬間の声は、あの有名な ‘To be, or not to be’ (3.1.57) の独白にも埋め込まれている。この独白は複数の解釈を許容する玉虫色のスピーチであり、肝腎の不定詞 to be が意味するところですら、意見の合意が成立しているわけではない (Bruster 15–20)。しかしながら、独白の前半部分における極めて抽象的な表現、脱線に継ぐ脱線を経て辿り着く結論は、思いのほか明晰である。

And thus the native hue of resolution  
Is sicklied o’er with the pale cast of thought,  
And enterprises of great pith and moment  
With this regard their currents turn away  
And lose the name of action. (3.1.85–9)

もちろん、ここに問題がないわけではない。例えば、great pith (87) は F1 の読みであり、Q2 では great pitch であるから、「真髓 (pith)」と「高み (pitch)」とでは意味が変わる。また、turn away (88) も F1 に従う Oxford 版の読みのために、やや意味が解りにくい。むしろ Q2 の読みである「斜めにそれる (turn awry)」の方が「水の流れ (currents)」との組み合わせとしては据わりが良い。だが、これらは本文の正しい読みを探求する書誌学上の問題であって、ハムレットという人物の内面を左右する性質のものではないだろう。ハムレットが 20 行以上にわたる独白の末に辿り着く結論は、要するに、臆病風に吹かれて絶好の時期を逃し、「行動という名を失う (lose the name of action)」(89) のは許されない、ということ<sup>10</sup>である。「行動という名を失う」という句も難

<sup>10</sup> ただし、独白の結語の部分にハムレットが「行動を決意した」という意味に解釈しない、ドイツ人学者 Wolfgang Clemen や Alexander Leggatt のような意見もある (Clemen 140; Leggatt 65)。

解であるが、批評家ハロルド・ブルーム（Harold Bloom）は『ハムレット―際限なき詩』（*Hamlet: Poem Unlimited*）において「ハムレットの意志は行動という名を失うが、行動の本質を失うのではない。それは精神の高揚のなかで存在し続けている（Hamlet's will loses the *name* of action, but not the true nature of action, which abides in the exaltation of mind）」と解釈している（Bloom 36）。この帰結は、ヘンリー・キングの説教を参照するとき、至極当然なものと思えてくる。ハムレットにとって、父の言葉を「想起する」ことは、単にその言葉を頭のなかで回想するだけでなく、実行を含んでいる。たとえ復讐の機会が偶発的に主人公の意志とは無関係に到来したように見えるとしても、それはこの芝居が「記憶」と「行動」との危うい均衡から成り立っていることをただ証明しているだけである。

## Bibliography

- Bloom, Harold. *Hamlet: Poem Unlimited*. (New York: Riverhead Books, 2004).
- Bruster, Douglas. *To Be Or Not To Be*. (London: Continuum, 2007).
- Clemen, Wolfgang. *Shakespeare's Soliloquies*. Trans. by Charity Scott Stokes. (London: Methuen, 1987).
- Collinson, Patrick. *The Religion of Protestants: The Church in English Society 1559–1625*. (Oxford: Oxford University Press, 2003).
- Dickens, Charles. *A Christmas Carol and Other Christmas Books*. Ed. Robert Douglas-Fairhurst (Oxford: Oxford University Press, 2008).
- Fraser, Antonia. *The Gunpowder Plot: Terror and Faith in 1605*. (London: Phoenix, 2005).
- Gager, Valerie L. *Shakespeare and Dickens: The Dynamics of Influence*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1996).



- Greenblatt, Stephen. *Hamlet in Purgatory*. (Princeton: Princeton University Press, 2002).
- Gurr, Andrew. *Hamlet and the Distracted Globe*. (Edinburgh: Sussex University Press, 1978).
- Jackson, Ken and Arthur F. Marotti. 'The Turn to Religion in Early Modern Studies.' *Criticism* 46 (Winter 2004) 167–90.
- Kastan, David Scott. 'Forgetting Hamlet.' *A Will to Believe: Shakespeare and Religion*. (Oxford: Oxford University Press, 2014) 118–149.
- King, Henry. *A Sermon Preached at Pauls Crosse*. London, 1621. [STC 14969]
- Lees-Jeffries, Hester. *Shakespeare and Memory*. (Oxford: Oxford University Press, 2013).
- Leggatt, Alexander. *Shakespeare's Tragedies: Violation and Identity*. (Cambridge: Cambridge University Press, 2005).
- MacLure, Millar. *The Paul's Cross Sermons 1534–1642*. (Toronto: University of Toronto Press, 1958).
- Powers, William. *Hamlet's BlackBerry: Building a Good Life in the Digital Age*. (New York: Harper Perennial, 2010).
- Shakespeare, William. *Hamlet*. Ed. G. R. Hibbard. (Oxford: Oxford University Press, 1990).
- Sharpe, James. *Remember, Remember the Fifth of November: Guy Fawkes and the Gunpowder Plot*. (London: Profile Books, 2006).
- Stallybrass, Peter. Roger Chartier, J. Franklin Mowery, and Heather Wolfe. 'Hamlet's Tables and the Technologies of Writing in English Renaissance.' *Shakespeare Quarterly* 55 (Winter 2004) 379–419.
- Sullivan, Garrett A. Jr. *Memory and Forgetting in English Renaissance Drama: Shakespeare, Marlowe, Webster*. (Cambridge: Cambridge University Press, 2015).
- Willis, John. *The Art of Memory as it Dependeth upon Places and Ideas*. London, 1621. [STC 25749]
- Young, Jennifer. 'Religion in Shakespeare's London: *Hamlet* (1600–1) and St Paul's'. *Shakespeare in London*. (London: Bloomsbury, 2014).